

委託事業実施内容報告書

平成23年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【ボランティアを対象とした実践的研修】

受託団体名 財団法人 箕面市国際交流協会

1 事業の趣旨・目的

2008年度から2010年度にかけての取り組みの成果と課題を受け、外国人少数点在地域における「なにも失くさない(=相手の母文化や母語に対する自尊感情を損ねない)日本語教育」に関して、地域・学校・行政など地域において講演や研修企画を実施する。また企画立案や講師派遣を行う外国人市民当事者グループの自立化を一層促進し、自立的・持続的な地域社会の対話の仕組みづくりを進める。

2 運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
6月11日	箕面市国際交流協会	呉寿恵、金星令、崔聖子、井上亜梨沙、福井優紅、金美英、松本登、真嶋潤子、諏訪忠泰、ロニーマサリエゴス、巖馥、劉正宜、岡村公子、小西敏広、南山晃生、セーリムパンニー、河合大輔、張茜、井上勉、岩城あすか、楠本瑤子	①自己紹介ワークショップ ②今年度事業説明 ③出講予定 ④運営会議の年間スケジュール調整	議事録参照
8月20日	箕面市国際交流協会	呉寿恵、崔聖子、井上亜梨沙、福井優紅、金美英、松本登、諏訪忠泰、劉正宜、岡村公子、南山晃生、セーリムパンニー、河合大輔、張茜、井上勉	①出講報告 ②今後の予定	議事録参照
10月8日	箕面市国際交流協会	呉寿恵、金星令、崔聖子、福井優紅、金美英、真嶋潤子、本間直樹、諏訪忠泰、劉正宜、小西敏広、セーリ	①出講報告 ②模擬授業 ③事務連絡	議事録参照

		ムパンニー、河合大輔、張茜、井上勉		
11月12日	箕面市国際交流協会	呉寿恵、金星令、崔聖子、福井優紅、金美英、松本登、本間直樹、諏訪忠泰、岡村公子、小西敏広、セーリムパンニー、河合大輔、張茜、井上勉	①出講報告・予定 ②模擬授業 ③事務連絡	議事録参照
1月14日	箕面市国際交流協会	金星令、崔聖子、井上亜梨沙、金美英、本間直樹、諏訪忠泰、ロニーマサリエゴス、劉正宜、岡村公子、小西敏広、セーリムパンニー、河合大輔、張茜、井上勉	①模擬授業 ②今年度事業のふり返り ③来年以降の事業継続について	議事録参照

【写真】



→運営会議の風景1(6月11日)



→運営会議の風景2(1月14日)

3 講座の内容について

(1) 講座名

「わたしは日本で生きています」

一少数点在地域での「なにも失くさない日本語教育」を考える

(2) 目標

- ① 若年層への働きかけ、若い世代の外国人当事者及び地域住民の交流促進
- ② 学校関係者(教師や保護者)への働きかけ(教育関係者を対象とした研修)
- ③ 医療関係者への働きかけ(多国籍化が進む医療現場の関係者を対象とした研修)
- ④ 行政機関への働きかけ(市議会議員や市職員を対象とした研修の充実)

(3) 受講者の総数 157人

(4) 開催時間数(回数) 40時間 (12回)

講義 6.5時間 (3回) 実習 33.5時間 (9回)

(5) 参加対象者の要件

特になし。

(6) 受講者の募集方法

- ・広報チラシの作成
- ・当協会情報誌「めろん」、ホームページに情報掲載
- ・市広報「もみじだより」などに情報掲載
- ・近隣大学、国際交流団体に情報掲示依頼

(7) 会場

ア 講義 大阪大学豊中キャンパス(豊中市)、箕面市教育センター(箕面市)、箕面市役所(箕面市)、JICA 大阪国際センター(茨木市)

イ 実習 箕面市国際交流協会

(8) 使用した教材・リソース

『非識字体験ゲーム:「ここは何色?」「はじめてのお見舞い」』

製作:国際教育研究会 Global net Shiga、(財)滋賀県国際交流協会

『「言葉がわからない」体験ゲーム:何が起こった?(震災編)』

製作:国際教育研究会 Global net Shiga、(財)滋賀県国際交流協会

その他、各講師による独自教材

(9) 講座内容

日時	講座名/学習内容	講師	受講者数
7月26日 19:00~21:00	在住外国人との語り 合いカフェ 「私の見た日本」	本事業運営委員 金星令、崔聖子、福井優紅、金 美英、本間直樹、諏訪忠泰、ロ ニーマサリエゴス、劉正宜	33人
8月10日 14:00~16:30	ワークショップ 「読めないお知らせ」	本事業運営委員 金星令、崔聖子、福井優紅、金 美英、劉正宜	20人

9月27日 18:30~21:00	在住外国人との語り 合いカフェ 「私の見たあなたと あなたの見たわたし」	本事業運営委員 崔聖子、福井優紅、金美英、本 間直樹、諏訪忠泰、ロニーマサ リエゴス、劉正宜	27人
11月22日 18:30~21:00	在住外国人との語り 合いカフェ	本事業運営委員 金星令、崔聖子、福井優紅、金 美英、本間直樹、諏訪忠泰、ロ ニーマサリエゴス、劉正宜	27人
12月6日 18:30~21:00	在住外国人との語り 合いカフェ	本事業運営委員 崔聖子、福井優紅、金美英、本 間直樹、諏訪忠泰、ロニーマサ リエゴス、劉正宜	23人
1月18日 13:30~15:30	多文化共生の地域づ くり ～私にとっての「名 前」、「ふるさと」、「子 ども」～	本事業運営委員 金星令、崔聖子、福井優紅、金 美英、セーリムパンニー	28人
1月25日 18:00~21:00	在住外国人との語り 合いカフェ	本事業運営委員 金星令、崔聖子、金美英、本間 直樹、セーリムパンニー、張茜	25人
2月13日～ 9:00~12:00 13:00~18:00 2月14日 9:00~12:00 13:00~18:30	ネオソクラテイクダ イアログ(NSD)	【本事業運営委員】 崔聖子、金美英、本間直樹、張 茜、河合大輔、岩城あすか、セ ーリムパンニー。 【大阪大学大学院生】 服部佐知子、辻明典、金和永 【当協会契約職員】 樋野都子	10人
3月3日 13:30~15:30	「きいてもいいの？ いけないの」 ～医師・外国人患者 間で起こるコミュニ ケーションギャップ とは～	大谷晋也(大阪大学准教授)、 中本剛二(大阪樟蔭女子大学 非常勤講師)、 雨宮京夏(箕面市立病院産婦 人科部長)、西島律子(箕面市 立病院看護師長)、橋本正登 (箕面市消防署課長補佐)、楊	55人

		艶紅(当協会中国語相談員)、 金姫延(当協会朝鮮・韓国語相 談員)、東堂マリナ(当協会契 約職員)	
--	--	--	--

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

日時:7月26日、 9月27日	在住外国人との語り合いカフェ	場所:大阪大学オレンジショップ
<p>・新たな世界が広がり、とても刺激を受けました。</p> <p>・アイデンティティについて、まさにアイデンティティを語るに相応しい場所と人で話せた。</p> <p>・言葉を交わすことで、日常生活の中では通り過ぎてしまうようなテーマをじっくりと考えることができた気がする。</p> <p>・グループでの話し合いは密度が濃くて、面白かったです。一つのテーマでも、いろんな視点から話が広がって興味深かった。</p> <p>・海外の若者と日本の若者の違い。豊かさによって意識が変わり、働き方も変わるのだなと思いました。</p>		

日時:8月10日	ワークショップ～読めないお知 らせ～	場所:箕面市教育センター
<p>・日本で困らないために、どんどん日本語が使えるように教育していかなければならないと思っていたが、それをきっかけとして、ルーツを忘れる子どもも多いことがわかった。ルーツに対して、誇りを持つ教育環境の提供が必要だと感じた。</p> <p>・「何もなくさない日本語教育」に込められた想いの大切さについてのお話が、一番印象に残りました。</p> <p>・ルーツを大切にできる教室にしてほしいという言葉に、どういう手立てや環境づくりができるのか・・・と考えさせられました。</p> <p>・言葉が分からなくてもお互いに理解しあう姿勢が一番大切だと思いました。外国にルーツを持つ子どもの担任になったとき、今日学んだことを活かしていきたいと思います。</p>		

日時:11月22日、 12月6日	在住外国人との語り合いカフェ	場所:大阪大学オレンジショップ
<p>・毎回ここに来るたびに発見があり、楽しませてもらっています。グループで自由に話す時間がとても良いです。</p> <p>・せっかく臨床哲学研究室の方がファシリテートしてくれていたのでも、専門的なアプローチもして頂けたら、普段国際交流協会でも話しているのとは違う切り口があったかもしれないと思った。</p>		

- ・外国人の方が日本で暮らす上で不便に思っていることや、不思議に思っていることを知ることができた。日本人の人が他人との間に距離感を持ってしまうのは、島国だからなのかなと思いました。
- ・この企画はもっと日頃、多文化共生活動に関心のない人にも参加してもらいたい。
- ・自分の言いたいことをうまく伝える事ができなかったように思う。マイノリティーに対する理解を深めてほしい。
- ・今後とも毎回いろんなテーマで参加したいので、ぜひとも続けて頂きたい。

日時:1月18日	箕面市役所職員研修	場所:箕面市役所第三別館
<ul style="list-style-type: none"> ・今までの思いなど聞かせて頂きました。今まで聞く機会がなかったので、良かったです。親しくなって、もっといろいろ話できるといいなと思いました。 ・韓国の方と中国の方とタイの方のディスカッションで、韓国の方が長く住んでもしんどさが変わらない、といわれたのが心に残りました。名前のところで、外国人登録のところでも気配りしなければと思いました。 ・外国人というくりでまとめられてしまいがちだが、一人ひとりがそれぞれの気持ちや思いを持っていることを聞いて有意義でした。 ・メディアでもよく取り上げられる内容ですが、実体験を踏まえた話しや直接の意見交換ができたことで、問題への意識が身近になった。やはり一方的に見るだけではなく、意見のやりとりをすることが大切だと感じました。 		

日時:1月25日	在住外国人との語り合いカフェ	場所:大阪大学オレンジショップ
<ul style="list-style-type: none"> ・会話の相互性が実現されたように思いました。 ・普段あまり話せないことを話せた。 ・新しい人と話す機会があつて面白かった。 		

② 実施主体からの研修内容結果評価

今年度、全9回の講座を開催した。全体を通して、講師である外国人市民が日本で暮らすなかで経験した異文化体験や、自文化と日本文化との狭間で揺れ動く気持ちなどについて、自由に表現できる環境づくりを目指した。そのために運営委員会のなかでは模擬授業を行って他の委員から質問や助言を投げかけ、講師が話を整理したり深めたりする機会を持つことを重視した。

各講座のなかでは、小グループに分かれての「語り合い」の形式を積極的に採用し、参加者との双方向でのコミュニケーションを促進することを目指した。外国人市民からの一方的な発話だけでは形式的な研修に終わり、相互理解の深まりが果たせないことが多い。むしろ相互の違いや違和感を顕在化させ、その間にあるギャップの所在について対話することでこそ相互理解が深まり、ひいては「日本語や日本文化を学び、理解すること」と「母文化

や母語に対する自尊感情を損ねない」という両者を実現するという本事業の目的につながるのではないかと、との運営委員会での議論を踏まえてのものである。

大阪大学コミュニケーション・デザインセンターの協力のもと実施した「在住外国人との語り合いカフェ」では、毎回テーマを設定して在住外国人と参加した地域の人たちとの語り合いを実施した。テーマ設定においては、参加者全員にとって当事者性や各自の経験があるような、フラットな話題を設定することにより、語る側と聴く側が固定されず全員による「語り合い」が実現できるよう努めた。設定されたテーマは、「同調意識」、「子ども」、「ふるさと」、「家族」、「あいさつ」、また「どうして『スポーツなどでどの国を応援するか』ということを私たちは知りたがるのだろうか」「人生の最期はどちらで迎えたいですか？」「あなたにとって「名前」とはなに？」などである。これらのテーマ設定により、外国人市民の間にも、日本人の間にも差異や個性があること、同時に異文化や異国で暮らすことによる悩みや感覚などが語り合いのなかで浮かび上がり、参加者全体にとって学びの多いものとなった。またフラットな語り合いにより、「地域の隣人」としてのコミュニケーションを積み重ねる機会とすることができた。

同講座のうち2度にわたり、語り合いに先立って複数の外国人市民によるパネルディスカッション、あるいは1人の外国人市民に対する公開インタビューを実施した。これにより講師の経験や気持ちを自由に表現し、これをふまえて語り合うという流れを生み出すことができた。

一方で「在住外国人との語り合いカフェ」と題したことにより、参加者の側が「外国人の話」を期待し、また在住外国人の側が「外国人として語る」ことを意識せざるをえない状況が生み出された。本事業の目的は、「母文化や母語に対する自尊感情を損ねない」日本語教育であり、「日本人が期待する外国人」ではなく、ありのままの個人としての「〇〇さん」が持つ文化が尊重されるような場づくり、日本語教育を目指すことにある。講座の実施課程では「期待される外国人」に対応することへの疲労感が表明され議論となった。今後の課題としたい。

市教育センターでの教員研修、市役所での職員研修においても、この「語り合いカフェ」の形式を活用した。これらの講座においても外国人市民が行政や学校の課題を指摘するという一方的な発話ではなく、外国人市民が学校や市役所での経験や想いを語り、また教職員の側からも学校や市役所の事情や個人的な思いなどを語り合う機会とすることで、相互理解の場づくりに努めた。外国人市民に対する制度的なサポート体制が不足しているなかで、学校・行政関係者と外国人市民との間の意識のギャップは依然として大きい。こうした対話の場を積み重ねる地道な努力は今後も重視されるべきであろう。

「ネオソクラティックダイアログ」は大阪大学の本間直樹准教授(臨床哲学)の指導のもと

に行った、哲学的な手法を用いた対話の試みである。「問い」を立て、吟味し、この「問い」に答えるまでのプロセスを参加者全員による対話を積み重ねることで辿っていく、2日間のプログラムである。本企画には運営委員に加えて、協会職員、大学院生などが参加し、「弱者はどう自分を表現するのか」という問いについて対話を行った。これを通して参加者は異なる経験や意見が分かれるテーマについて、ひとつの「答え」を出すための対話をする事、これを通して相互理解を深めていく手法を学んだ。語り合いカフェでは、浮かび上がってきた差異や違和感から対話を掘り下げていくには時間が足りないが、ネオソクラティックダイアログでは、時間を十分にかけ吟味する手法を学ぶ機会となった。

『『きいてもいいの？いけないの』～医師・外国人患者間で起こるコミュニケーションギャップとは～』は、箕面市医療事務連絡会（構成：みのお外国人医療サポートネット、箕面市医療保健センター、豊能広域こども急病センター、箕面市国際交流協会、箕面市立病院、箕面市消防署、市健康増進課、市人権国際課）が主催し、市内の医療・保健関係者、医療通訳ボランティアなどを主な対象として開催された。本企画では、日本での医療にまつわる経験やとまどいを外国人市民が話し、それをめぐって医師や看護師、救命救急士らがディスカッションを行った。いわば公開での語り合い企画となり、参加者全員にとって気づきの多い講座となった。

③実施主体からの外国人支援体制等、今後の計画

若年層、学校関係者、医療関係者、行政機関などホスト社会側への働きかけを継続的に行えるように地域社会、公的機関との連携を強めていくためのサポートを行う。外国人当事者を講師として派遣するなどの活動を行う NPO の設立を、本事業の運営委員が中心となって実現できるよう、組織運営など必要な知識・ノウハウをアドバイザーとして提供していく。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

在住外国人が少数で点在している本市においては、同じ文化背景を持った外国人のコミュニティが形成されにくい。本事業においては初年度から、運営委員に参加した外国人当事者が様々な場面でその想いを発信することにより、自己表現力を高めることを目指してきた。4年目となった本年は、「語り合い」の取り組みに重点を置き、一方通行の「発信」から「外国人当事者」と「地域住民」がお互いに耳を傾ける双方向のコミュニケーションを重視した。このような相互理解を重ねることで、運営委員の外国人当事者は日本社会における自己表現とコミュニケーションの能力を高める機会を得ることができた。また運営委員は、地域社会と外国人市民をつなぐネットワークのキーパーソンとなりつつある。今後、こうした活動は「外国にルーツを持つ子どもサポート事業」、「多言語に

よる生活相談」などの外国人当事者のエンパワメントを目的とする事業に、よい刺激を与えることが期待される。

② 研修後の人材活用

外国人当事者の運営委員たちは、皆高度な日本語能力を持ちながら、地域で活躍している人材である。更に、本事業を通して表現力を高める機会を得ることができた。彼らは、外国人としての視点や経験を活かし、「国際理解」、「外国人の人権」、「多文化共生」に関する講座や課題解決の取り組みにおいて、講師やアドバイザーとしてより一層活躍することが期待される。また数年間にわたる本事業での経験を生かして、地域の外国人市民のエンパワメントと人材育成を進める主体となることができる。

(12) 今後の課題

本事業では相互理解の手段として、日本語を共通言語とした言語コミュニケーションによるメッセージの発信、語り合いを用いた。その結果、参加できる外国人当事者は高い日本語能力をもつ者に限られた。今年度は、依然継続している「日本語ができない外国人市民の参加」を事業実施上の課題として確認し、運営委員が自らの語りのなかで周囲にいる友人や家族など、事業に直接参加していない外国人市民の経験も含めて伝えていくことを目指した。だが、文化背景の違いや本人しか表現できない気持ちや思いなどもあり、「代弁」には限りがある。「日本語ができない外国人市民の参加」は今後も課題となる。

また講座では運営委員が自分の経験を基づいて講演や語り合いを行った。そのため外国人市民の社会課題として、一般性の高い内容もある一方で、個別性、特殊性の高い内容もあった。今後、どうやって講座内容を充実していくか課題となる。

2年目から若年層の外国人当事者に運営委員となってもらおうよう積極的に働きかけを始めたが、就学・就職など日常の生活に追われる状況のなかで、今年度は若者の関わりが少なかった。事業を継続していくために、次世代育成は今後の大きな課題と考えられる。

最後に、近隣大学との協働、市役所職員研修、教育センターへの出講が定着したことで、自律した活動グループが形成されつつある。ただ、日本社会の中で外国人市民が主体となり、組織として持続的に運営していくための知識やノウハウまだ十分ではない。これは、この活動が継続していく鍵ともなる。当協会が寄り添いの支援を続けつつ、互いに模索していく必要がある。